

## エース損害保険株式会社

PacketShaperにトラフィック圧縮モジュールを追加  
利用可能帯域は約3倍、レスポンスタイムも大幅に改善



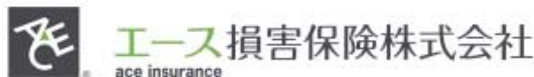
エース損害保険では、アプリケーション・パフォーマンスとユーザーのレスポンスタイムの改善を目的に、Blue Coat PacketShaperのトラフィック圧縮モジュール「PacketShaper Xpress」を採用。利用可能帯域は従来の約3倍となり、レスポンスタイムも大幅に改善した。

### 【この事例でのBlue Coat PacketShaper 圧縮モジュールXpress導入・活用のポイント】

先進の圧縮技術によりアプリケーション毎に最適な圧縮が可能

圧縮で拡張した帯域を重要なアプリケーションに優先して提供可能

帯域増強などの代替ソリューションと比較した場合の高い費用対効果を提供



システム運用部 部長  
加藤 文武 氏



システム運用部 課長  
渡辺 詳象 氏



システム運用部  
有岡 健 氏

アクセスが集中する時間帯にWANの遅延が発生  
パフォーマンスの改善が課題

エース損害保険株式会社(以下、エース保険)は、スイス、チューリッヒを拠点とする世界有数の保険会社であるエース・グループの日本法人。エース・グループは、世界50カ国以上で事業を展開し、約16,000名の従業員を擁する保険・再保険分野で世界有数のグローバル・プレーヤーである。エース保険は、日本国内では、前身企業を含めて外資系損保会社として最長となる85年以上の歴史を持つ。斬新な発想とエース・グループのグローバルなネットワークをもとに、個人から法人まで幅広く革新的な損害保険商品を提供しており、2000年には、生損保業界で初めてISO9001認証(認証範囲:損害サービス部門)を取得するなど、先進的な取り組みで業界をリードしている。

エース保険は、都内に本社(目黒)を含めた3つのオフィス、全国に13の支店と12のサービスオフィスを展開している。しかし近年、WANの利用増加を背景として、朝の業務開始直後など各支店・サービスオフィスから渋谷のデータセンターサーバーにアクセスが集中する時間帯にWANの遅延が生じ、レスポンスが低下するといった問題が生じていた。その結果、支店やサービスオフィスの社員は長い待ち時間を強いられ、業務にも支障が出るようになっていたという。

エース・グループ内で圧縮モジュールを初採用  
パフォーマンスの大幅改善と費用対効果を実感

同社では、これらの問題を解決するため、当初、帯域の増強、WAN高速化に特化したアプライアンスの導入などの検討を行った。しかし、

#### 企業名

エース損害保険株式会社

#### 業務形態

保険業

#### 設立

1996年1月26日(日本法人化)

#### 住所

〒153-0064 東京都目黒区下目黒1-8-1 アルコタワー  
TEL 03 5740 0600(代表) <http://www.ace-insurance.co.jp>

#### 代表取締役社長

今井 隆志

#### 従業員数

487名

#### 事業内容

傷害保険、医療保険、自動車保険、賠償責任保険、  
ほか各種保険商品とサービスの提供

その検討過程の中で、すでに導入していたPacketShaperにトラフィック圧縮モジュールが存在することを知り、その優れた機能に注目するようになったという。

エース保険の情報システム本部 システム運用部長の加藤文武氏は、「帯域を増やすのと、圧縮をかけるのとどちらが良いかについて前から検討していたのですが、PacketShaperの製品サイトに圧縮に関して効果があるという情報を発見し、いろいろ調査を行いました」と語る。

そして2007年夏にPacketShaperをアップグレードすると同時に、本社とデータセンター(渋谷)間のPacketShaperに圧縮モジュール「PacketShaper Xpress」の導入を決定したのである。

従来、エース保険では、エース・グループの全世界の採用基準に基づいてPacketShaperを帯域制御装置として利用していたが、通信の高速化を目的に圧縮モジュールを導入するのは、エース保険がエース・グループ初のケースとなった。

圧縮モジュールの導入効果について加藤氏は、「PacketShaperは以前よりVoIPやビデオ会議のネットワークにおいても活躍しており、その機能を十分に発揮していました」と前置きした上で、次のように解説する。

「今回は、圧縮モジュールのPacketShaper Xpressをテスト導入したところ、ブルーコート社(旧パケッティア社)のホワイトペーパーに掲載されていたのと同様の効果を得ることができました。実際、圧縮によって100Mbpsの回線で実効300Mbps以上と利用可能帯域はこれまでの約3倍にまで拡張され、レスポンスタイムも大幅に改善されています。また、ビデオ会議においても大きな効果を確認しており、100Mbpsのバックボーンでまったく問題ありません。マルチポイントでも大丈夫です。しかも、帯域増強などの代替ソリューションと比べて、費用対効果の大きさを実感しました。さらに社員からもファイルへのアクセスやインターネットのアクセスが、非常に早くなったと高評価を得ています」

圧縮モジュール導入の効果を高く評価し、海外のグループ各社でも採用を検討

今回エース保険が導入したトラフィック圧縮モジュールは、PacketShaper間でデータ圧縮トンネルを自動的に構築し、データの品質を失うことなく、最高で10倍もの圧縮効果を得ることができる。また、帯域拡張

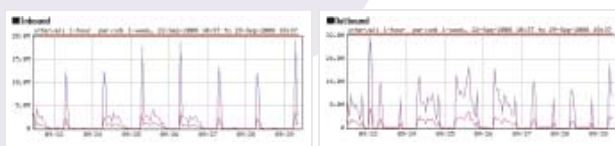
とは異なり、先進の圧縮技術によってアプリケーション毎に最適な圧縮アルゴリズムを適用し、きめ細かな帯域管理が行える点も大きなメリットだ。これにより圧縮で拡張した帯域を制御し、重要なアプリケーションに対して十分な帯域を提供することで、業務の改善、加速化に大きく貢献することができる。

エース保険では、今回の本社とデータセンター間における圧縮モジュール導入の効果を高く評価しており、すでに清澄オフィス、大手町オフィス、大阪支社、名古屋支店、北海道支社の5拠点のPacketShaperにも圧縮モジュールを追加したことで、より多くの効果を上げている。今後も、まだ導入していない他支社についても順次導入していく予定だ。

「各拠点を随時切り替えていくのはもちろんとして、シンクライアントでの利用も検討しています。そのためにも圧縮が不可欠と考えています」とシステム運用部課長の渡辺詳象氏は指摘する。

さらに日本の結果を受けて、海外のエース・グループ各社でもPacketShaperに圧縮モジュールを追加することを検討しているという。PacketShaperはエース・グループのスタンダードとして、全世界で200台以上が導入されている。

「当然、海外のエース・グループ各社との通信も頻繁に行っていますから、先方が速くなくなると困ります。特に、アジア地区という意味では、西安や上海に早く導入したいですね。西安のバックボーンを100Mbpsに切り替えるタイミングで、導入を考えています」と加藤氏は述べている。



圧縮効果  
青の折れ線が圧縮前、赤の折れ線が圧縮後。Inbound、Outboundとも3～5倍の圧縮率が達成されていることが分かる。

